

## ンガバでなにが起きているのか ～2011年10月

### **2008年3月 チベット全土に広がった抗議 —ンガバでも**

3月10日、ラサ市街地へ歩いて向かったデブン僧院僧侶が弾圧を受け、弾圧への抗議と更なる弾圧が繰り返されたのち、2008年3月14日、武装した治安部隊がラサ市民に銃を向け、多数のチベット人が殺された。

3月16日、ンガバでもキルティ僧院の僧侶たちが街頭に出て、一般市民も加わり、大きな抵抗活動となった。警察と軍隊は僧侶や一般市民にためらわず襲いかかり、殴り、発砲し、路上もキルティ僧院境内も血の海になった。

### **2009年2月27日 — タペーの抗議**

キルティ僧院の僧侶タペー（ロプサン・タシ）が、ンガバの街頭で自らの体に火を放った。3月10日（1959年チベット蜂起）、14日（2008年ラサ蜂起）、16日（2008年ンガバでの蜂起）の日付を前に僧院内で思想教育が強められ抑圧が強まり、2月27日、チベット暦正月のモンラム（大法会）が中止させられたことに、焼身自殺という形で抗議した。タペーは武装警察と軍隊に撃たれ、連行された。容体は2011年10月現在も不明のまま。

### **2011年3月16日 — プンツォの抗議**

3月16日午後、キルティ僧院の20歳の僧侶プンツォが、僧院から200mほどのンガバの町中心部で焼身自殺をはかった。駆けつけた武装警察や私服警官、警察がプンツォを取り囲み、警棒で激しく彼を殴打した。周囲の人たちや寺院から飛び出してきた僧侶たちがプンツォを救い出し、病院に運んだが受け入れを拒否され、やむなく彼の身柄を警察に引き渡した。当日の深夜になってプンツォは入院したが、彼の容体は回復せず、17日午前3時に死亡した。

その後、プンツォの親族を始めとするキルティ僧院と関係者が次々に逮捕され、通常の仏教修行に代わって「愛国愛教」活動（宗教信仰の前に国家への忠誠が先立つという政治学習キャンペーン）が強制された。

### **2011年4月21日 — 住民と軍警の対峙と武力弾圧再び**

4月上旬までに武装警察800人がキルティ僧院を包囲し、僧院を封鎖。地元住民たちは、僧侶が大量に逮捕拘束されることを恐れて、4月11日から僧院の山門前に座り込み、にらみ合いとなった。21日午後9時半過ぎ、座り込んでいた地元住民約200人に、中国の武装警察の特殊警察部隊（特警）が強行突入。阻止しようとした60歳男性と65歳の女性が殴り殺され、多数の重軽傷者が出た。僧院内へ突入した特警は僧坊を1部屋ずつ襲い、翌朝までに300人以上の僧侶が拘束され、連行された。彼らの行方はその後も分かっていない。ンガバの阿壩県中学（中高一貫制の高校）でも学生たちが抗議のハンガーストライキを行ったが、すぐに校内からの外出禁止措置が取られ、一時軟禁状態となった。当局は全生徒の教科書とノートをチェックし、一部を燃やした。

### 2011年5月26日 — 懐柔策

既に2カ月以上も武装警察がキルティ僧院周辺に配備され、当局が日々の修行や行事に介入し、僧侶たちが不満を募らせるさなか、キルティ僧院の僧侶にひとりあたり800元を毎月支給する計画を当局が発表。5月26日には最初の400元が支給されたが、憤慨した僧侶たちは受け取りを拒否した。

### 2011年8月15日 — タウでも

カンゼのタウ（道孚）\*にあるニンツォ寺の僧侶ツェワン・ノルブ（29歳）が8月15日12時30分過ぎ、チベットでの中国支配と、中国当局のチベット人への不当な扱いに抗議して焼身自殺した。タウ中心部のチュメ橋で、彼は「チベットに自由を」「ダライ・ラマのチベットへのご帰還を」とチラシを配りながら10分間にわたって叫んでいたという。ニンツォ寺の周辺や正門前にはその後、彼の死を悼む約1万人の群衆が集まり、配置された武装部隊と一触即発の状況になった。

\*カンゼのタウはカム地方だが中国の行政区分ではンガバと同じ四川省に区分され、互いの距離は約450Km。

### 2011年8月29日 — 関係者が殺人罪に

アバ県法院（裁判所）は8月29日、キルティ僧院の僧侶ツォンドゥに有期徒刑11年の判決を言い渡した。ツォンドゥは「3月16日に焼身自殺をはかったプンツォを匿い、必要な医療を受けさせなかった」として「計画的殺人」で起訴されていた。翌30日にはさらに22歳と21歳の2人のチベット僧がそれぞれ13年と10年の判決を受けた。3人は3月の事件直後に当局に拘束されていた。

### 2011年9月26日 — ケルサンとクンチョクの抗議

9月26日午前10時半頃、ンガバ中心部の市場で「ダライ・ラマ万歳」「チベットでの宗教の自由をください」といったスローガンを掲げて抗議を行っていたキルティ僧院の僧侶ロブサン・ケルサンとロブサン・クンチョクが自らの身体に火を放った。武警と公安が消火を行った後、2人の僧侶は即座に連行された。ひとりには重体、もうひとりには現場で死亡したと言われているが詳細は不明のまま。

### 2011年10月3日 — ワンチュクの抗議

キルティ僧院の僧侶、ケルサン・ワンチュクがンガバの市場近くで焼身自殺をはかり、駆けつけた公安に暴行された上、連行された。目撃していた人々が抗議を始めたが、武装警察が銃で威嚇し、解散させられた。ケルサン・ワンチュクは連行された時、上半身にひどいやけどを負っていたといわれるが、その後行方不明になっている。

### 2011年10月7日 — チュペルとカヤンの抗議

10月7日11時半ごろ、ンガバ中心街でチュペル（19歳）とカヤン（他の情報によればルンヤン、18歳）が焼身自殺した。目撃者の話では、2人は町の大通りで炎に包まれながら両手を合わせ「チベット人は団結し立ち上がれ」「チベットに自由を」「ダライ・ラマ法王のご長寿を」と叫び続けていた。武装警察と公安が駆けつけ、2人を殴り倒し、火を消して病院に運んだ。ひとりには亡くなり、ひとりには意識があったとの目撃証言があるが詳細は不明。チュペルとカヤンはキルティ僧院の僧侶だったが、2011年3月に中国当局から僧院に戻ることを許されず、還俗させられた。カヤンの叔父タシは2008年3月の抗議で当局に殺されている。